



「インスピレーションになろう」 BE THE INSPIRATION

2018-19年度 RI会長／バリー・ラシン RI.D2590ガバナー／金子 大 横浜旭RC会長／市川 慎二

国際ロータリー第2590地区

横浜旭ロータリークラブ

事務所 横浜市旭区二俣川1-37-3 NJTS1階／〒241-0821
TEL.045-465-6702／FAX.045-465-6712
http://yokohamaasahirc.cho88.com

Email:asahirc@titan.ocn.ne.jp

例会場 横浜市旭区二俣川1-45-30工藤ビル
(㈱岡田屋 3階会議室)

例会日 毎週水曜日／12時30分～1時30分



被災地の子ども達にXマスプレゼント



チャリティーコンサート



ガールスカウトとクリーン作戦

2019年4月24日 第2380回例会 VOL.50 No.39 体験例会

■司 会 SAA 北澤 正浩

■開会点鐘 会 長 市川 慎二

■斉 唱 手に手つないで

■出席報告

会員数	30名	本日の出席数	24名
本日の出席率	92.31%	修正出席率	100%

■本日の欠席者

佐藤二郎、福村

■他クラブ出席者

新川（地区）

■ビジター

久保田雅徳様（横浜瀬谷 RC）

森本 潔様（横浜瀬谷 RC）

柳沼 芳光様（横浜瀬谷 RC）

■ゲスト

奥寺 康彦様（㈱フリエスポーツ会長）

片原大示郎様（横浜 FC スポーツクラブ）

坂本 保様（㈱坂本興業専務取締役）

西山宏二郎様（社会福祉法人藤嶺会理事長）

■会長報告

皆様、こんにちは。本日は、横浜旭ロータリークラブ体験例会に、多くのお客様をお迎えできましたこと嬉しく思います。ぜひ、奥寺様の卓話やクラブ会員との親睦を楽しんで頂き、そしてロータリークラブの活動や、例会の雰囲気を知っていただければと思います。

さて、平成としては最後のクラブ例会となりました。平成も、あと少しで幕を閉じようとしており、令和として新時代を迎えようとしています。振り返ってみると、平成が地平天成・内平外成の言葉通り、身内も穏やかに、世間も平和で幸せだったかという、歴史に残る大災害をはじめ、事故などが多くありすぎたと感じずにはられません。

横浜旭ロータリークラブは、1970年1月13日設立され、創立50周年を迎えますが、平成時代には、数多くの活動を行ってきました。ここ数年では黒めだかの配布、東日本大震災復興支援のチャリティーコンサートの開催、宮城県の幼稚園、保育園を訪問し、被災した子ども達へサンタクロースに扮してクリスマスプレゼントの配布、熊本地震では、被災地にリサイクル自転車を提供しました。

また、地域の方々へ情報提供として、県立がんセンター協力のもと、がんセミナーの開催や、外国人の子ども達への日本語支援の協力、ガールスカウトとの清掃活動など、多方面にわたります。

そして、令和という新時代にむけて、ロータリークラブでは、新しい仲間、新しい知識、新しい力を求めています。遠慮の必要がないこのロータリーの集いを通じて自分自身と、自分の職業の価値や品位を高めながら、活動

を継続発展させ、新しいニーズにも応えながら社会の幸せ、人びとの幸せを創る喜びを分かち合える仲間が増やせます。ぜひ皆様ご検討下さい。

○地区関係

・2019 学年度、米山奨学生の、ヒョウ・ハクさんが5月8日の例会に参加されます。

○クラブ関係

・5月8日に理事会が開催されます。

■卓話「私のサッカー人生」

奥寺 康彦様



皆さん今日は、今ご紹介して頂きました横浜FCの奥寺と申します。今回はお招き頂きましてありがとうございます。

二俣川は私共のホームタウンの一つ、皆様の前で、お話し出来る事に感謝しております。只今ご紹介がありましたように、私は中学からずっとサッカーをやっています、これだけ長くサッカーに携われるということは非常に幸せなことと思っております。

今サッカー界は非常に良い形で盛り上がっております、沢山の選手が海外に行っています。調べますと西ヨーロッパだけでもドイツ、オランダ、スペインなど約35人はおります。他にももっとおります。それだけ日本の選手が評価されていることだと思います。私達にとっても嬉しいことです。また子供達がサッカーを始めて、世界がすぐそこに見えていて、自分も行けると思っています。それがモチベーションになり、日本を抜けて海外に行くレールが引かれているように思います。

私自身の話ですが、40数年前にドイツに行くチャンスがありました。あの頃は皆さんも同じような年齢なので分かると思いますが、

当時サッカーは全然人気が無かったし、実業団、日本リーグと言っていましたが、お客さんといえば、社員だったり、一部のサッカー好きだけでした。日本代表チームが海外のチームと試合をしても、国立競技場がいっぱいになることはなかった。そういう時代でした。ですからプロに対する考え方も非常にネガティブと申しますか、例えばプロ契約をして帰ってきたら2年間プレーが出来ないとか、そういうルールがあり、プロに対する嫌悪感のような受入がたいものも作っていました。ですから考え方もアマチュアのレベルでした。そんな中で私がドイツに行くチャンスを得た訳で、それまでいろいろな事がありました。

大きなこととしては、当時のサッカー協会の中で、早くプロ選手を輩出しなくてはいけないと思う人がおりました。その一人に三菱重工の監督であった二宮さんがおられました。彼は三菱重工の監督をされ、海外での繋がりも非常に多かった方です。ドイツのメイヘンバッハというチームとの交流を頻繁にやっておりました。選手を何人も連れて行ってむこうの選手と練習を一緒にする。そういう繋がりがあって、そのバイスバイヤー監督と懇意にしておりました。

私が運が良かったと思うのは、二宮さんが日本代表の監督になり、そこから日本のサッカーを変えようと彼が動き出したことです。当時の合宿所は旅館でした。皆雑魚寝でした。今思うとスポーツをやるような環境ではなかった。でも二宮監督は、これではモチベーションも上がらないし、プロスポーツとして選手の管理も出来ていない。そこで彼は何をしたかと申しますと、まず環境。ホテル、一人一部屋、食事、そういった事から変えようとなりました。古い考え方の人からは選手が甘たれるという人もいたらしいです。

そんな考え方をもった二宮監督と日本代表としてドイツに遠征に行きました。普通は出来ないことですが、日本の選手が5人一組の4チーム20名で、ドイツのプロの選手の合宿に参加させてもらえました。8月のリーグ戦が始まる前の大切な合宿時期に、ドイツのプロの4チームが日本の選手を受け入れてくれました。何故練習をさせてもらえたか、それ

はバイスバイヤー監督から学んだ指導者がブンデスリーガに沢山おりました、そこをお願いし実現しました。そして私達は2軍で練習しており、そんな中で紅白試合に出させてもらったりしました。

あるとき二宮監督から突然「奥寺、今日は1軍の左サイドのフォワードとしてやれ」と言われました。凄く嬉しかったです。そうそうたる凄い選手達といっしょになってプレー出来るということ。それが試験とは思わなかったです。前々から試験だぞと言われたらカチカチになってプレー出来なかったと思います。私の特徴は足の速さ、左足のキックの強さで、この二つが私を世界に連れていってくれたのですが、その試合で運よく活躍出来ました。それで日本に帰ってくる前にバイスバイヤーが話があるといわれ、伺うと「仕事としてプロとしてサッカーをやらないか」と言うオファーを頂きました。今だったら情報が沢山あり、ある程度は事前に分かるのですが、その頃はどうせ無理だよなという世界から、突然お前やれと言われたものですから、本当に震えました。私は25歳になっていて、結婚して、子どもがいて…。

日本では大騒ぎになっていました。サッカー協会の皆はこんなチャンスは無いから行って来いと言われる。私の大先輩である杉山さんや釜本さんはオファーがあっても行けなかったし、いろいろな事情があった。でも今は行けるのだから行けと強く勧められました。かたや、両親は猛反対でした。何で今日本代表でプレーができ、古河電工で給料を貰え、何が不満なんだと。親からするとそんな冒険するなということ。私自身も凄く迷っていましたが、サッカーとしては迷いは無かったのですが、ドイツに住むということ。ドイツに住むということは、言葉も習慣も受け入れなくてはならない。言葉が分からない、家族もいる。そっちばかり気になりました。もし家族に何かあったら、どうやって伝えたらいいのか。そういう事、今思うと些細なことですが、凄く不安になりました。また、こうも思いました。それなら一年間準備をしてそれから行こうと。そこで二宮監督を通して一度断りを入れましたが、バイスバイヤー監督か

ら何でだと問われました。私は言葉も分からないし、家族のことが心配だと言いました。すると彼は「違う、今お前は必要されている人間なんだ、だからお前が先ず考えることはドイツに来てプレーする事なんだ。他の事、言葉？すぐ覚える。環境？すぐ慣れる。先ずお前が来てプレーする事が大事なんだ」と懇々と言われました。そこまで言われればとドイツに行くことを決めましたが、本当にその時もし、バイスバイヤーに逆に分かったと言われたら、今の自分はなかったです。チャンスは2度はありません。だって、私が一年間行かないとしたら、空いてるポジションは他の誰かに埋められます。やはり今なんです。チャンスはそこで掴まないとどこかにいってしまう。それは大きなことかも知れないし、もしかしたら失敗するかもしれません。それは分からない。

でも皆さんご存知のように、失敗や上手くいかないことが多くあると思います。上手くいくことの方が少ない。だけどサッカーの世界でもそうなんですけど、上手くいくかとか、自分がチャレンジしてプレーが出来たとか、試合に勝ったとか、点を取ったとか、優勝したとか、そんなチャンスは少ない世界なんです。だけどそれが出来た時は凄く喜びなんです。中々出来ないことだから。その喜びを知って欲しいんです。その喜びというのは自分も頑張ったし、チームも頑張ったし、だから成し遂げられたことなんです。成し遂げた嬉しさ、達成感。これが次への目標に向かうことになります。分かるんです。もうちょっと頑張れば出来る。ちょっと頑張れば行けるよと。そういう気持ちになれる。何故なれるかと言いますと、そこに見えるんです。そういう事が、私自身サッカーをやっていて経験しています。そんなに上手くいくことはないし、だけど失敗して次は絶対上手くいきます。そこを逃さないことなんです。怪我でもそうです。私がアマチュアの時、椎間板ヘルニアになり、いろんな事を試して諦めようとした時、サッカー部の部長さんからある治療院を紹介され通う内にドンドン良くなっていきました。これも一つの出会であり、振り返るといろいろな出会いやチャンスをものにして来たんだと思

います。

いくら上手くても成れないものは成れないんです。何かしらそういう物がないと。ですから一回断ったチャンスを止めてくれたことに感謝をしております。

その後9年間ドイツにおりました。最初はやはり信用してくれません。ボールくれないし、パスくれない。でも、やはりひた向きだったといったことでしょうか、真面目にプレーをしていると皆分かってくれる。当時はアジア人は誰もいません、日本人のことは誰も知らないし、日本人サッカー出来るのかという感覚でした。だけどバイスバイヤー監督はそういう先入観がない人で、テレビ局の方から「日本人大丈夫ですか」との問いに「サッカーは世界変わらない。サッカーはサッカーだ、人種が違ってやることはいっしょ。そこに優秀な選手もいる。」とおっしゃっていました。変な色眼鏡で見ない。そういうものが私を受け入れてくれた大きなことですし、尚かつ結果を出しました。1年目でケルンがブンデスリーガで優勝しました。バイスバイヤーに恩返しできたと思えました。最後の勝たなくてはいけない試合の決勝ゴールを決めることが出来ました。

そうことで、行ってすぐ結果を出すことが出来、現地の邦人方達からも感謝されました。言葉も必要に迫られ、学校にも行き、必死で覚えました。特に行った当初はとにかく必死でやらなくてはならないという思い。失敗したらどうのこうのではなく、やらなければいけない、家族もいる。また、ドイツという国も良かったかも知れませんが、すごく真面目で、厳しいし、その分評価もちゃんとしてくれました。私は人種差別的な事は言われたことはありません。

9年間の中で3年ケルンでやりました。3年契約でケルンはあと2年再契約してくれました。バイスバイヤー監督はケルンで折り合いが悪くアメリカに行きました。そこに新しい監督が来ました。そこで私にとりまして凄く悔しい思い出があります。外国人は2人しか試合で出れません。その監督は新しい外国人を連れて来ました。それもスイスの代表選手。私は3年やっているしなんとも思わなかつ

たのですが、レギュラーとしてやってきてるし、全然外されるとは思っていませんでしたが、試合に出してもらえず、練習だけ。私にチャンスはありません。いくら監督と選手でもプロはプロなんです。対等なんです。そこで監督に言いに行きました。「私は必要なんですか?」と。監督は少し時間をくれと言われ、1ヶ月待ちましたが、何の回答もありません。廻りの選手からもここに居てもチャンスはないと言われ、フロントに移籍を申し出ました。選手は契約すれば給料は貰えます。試合に出なくても。でも本当にやるなら実戦なんです。練習でいくら上手くても評価ではないんです。試合に出て、いいプレーをして初めて評価なんです。それが次のステップへつながります。私は評価まで行ってないんです。このまま居たら自分は終わってしまうと思い、2部のヘルタベルリンに移籍しました。向うは是非来てくれと。必要とされることはいいことなんです。やり甲斐があります。勿論給料は下がりますが。そこで私にとって大きな次につながる出来事がありました。

私はフォワードでディフェンスをやったことはないんですが、ある時、監督から「今日悪いけど右サイドのディフェンスをやってくれ」と言われました。「やったこと無いけどいいんですか」と言いますと監督から「かまわない、お前には経験はないけど知識がある」と言われやりました。そうしたら面白い。滅茶苦茶面白い。私は足が速く、両足蹴れるし、後ろからやれるのがフリーで出来る。こんなポジションあったんだ。だからよく言うんです。出来ない出来ない、無理無理ではなくやってみることなんだなど。やってみて初めて分かります。誰も責めないし。やはりチャレンジです。その為に努力しなくてはなりません。そういう訳で新しいポジションを見つけました。その後その右サイドでのプレーが評価され、新しいブレーメンでは5年間居ましたが、非常に重宝がられキーパー以外は全て出来る選手となりました。(文責：五十嵐)

■次週の卓話

5/15(水) 藤岡トミ子様(えかたり〜ベ)

週報担当 倉本 宏昭